

資料紹介

1930-40年代の中国社会学社の活動と その学会誌『社会学刊』の掲載論文について

星 明

〔抄 録〕

本稿は、主として資料をとおして中国社会学社の学会活動およびその刊行誌社会学刊の掲載論文が、1930-1940年代の時代状況のもとで、どのような影響を受けたかをみたものである。

中国社会学社は、1928年に上海で設立された東南社会学会が1930年に全国的規模に発展した団体であり、社会学刊は1929年に東南社会学会から発刊され、1930年に中国社会学社に引き継がれて1948年に停刊した。中国社会学社が学術活動を行なった時期は、1931年の柳条湖事件、1937年の盧溝橋事件、そしてそれに続いて日中全面戦争に至る時である。

本稿では、以下の資料をとおして中国社会学社の活動については年次大会の開催の延期、中断およびテーマへの影響、社会学刊については刊行の中断および掲載論文数への影響がみることができた。

【資料1】 東南社会学会の「組織経過」

【資料2】 中国社会学社成立会記

【資料3】 『社会建設』の発刊詞（第1巻第1期、1944年7月）

【資料4】 『中国社会学訊』（第1期、1947年4月15日、南京中国社会学社）の附録に記された「中国社会学社通訳之使命」（柯象峯）

【資料5】 『社会学訊』（第1期、1946年5月20日、中国社会学社広東分社）の編集後記

【資料6】 『社会学刊』掲載論文目録

【資料7】 『社会学刊』（第1巻第1期－第5巻第2期）の掲載論文ページ数割合の推移（龍冠海）

【資料8】 『社会学刊』（第1巻第1期、1929年7月）の凡例

【資料9】 『社会学刊』（第6巻合刊、1948年1月）の復刊詞（孫本文）

キーワード：中国社会学社、東南社会学会、社会学刊、中国社会学訊、社会建設

1. 中国社会学社の成立と年次大会のテーマ

中国社会学社（1930-1948）は、中国本土で中華民国期の代表的な社会学の学術団体の一つである。他の二つは余天休が創設した中国で最初の社会学の学術組織である中国社会学会⁽¹⁾（1922-1932 ごろ）と燕京大学社会学部が創設した燕京大学社会学会⁽²⁾（1927-1938 ごろ）である。

中国社会学社の成立は1930年であるが、それに先だつ学会は東南社会学会である。1929年7月発行の社会学刊の第1巻第1期（創刊号）に東南社会学会の「組織経過」が詳細に記述されている（【資料1】参照）。

この東南社会学会が全国的規模に発展して中国社会学社として発足した経緯が、1930年9月発行の社会学刊の第1巻第4期に詳細に記述されている（【資料2】参照）。

この学社が活動した18年間に開催した年次大会とそのテーマは次のようである（表1参照）。

表1 中国社会学社の年次大会

開催日 「テーマ」	開催場所
第1回 1930年2月12日 蔡元培講演 社会学と民族学ほか	上海四川路青年会
第2回 1931年2月12日 「人口問題」	南京中央大学
第3回 1932年9月1-4日 「家族社会学」	北平燕京大学
第4回 1934年4月6-7日 「民族文化、災害と凶作など」	上海八仙橋青年会
第5回 1935年4月2-3日 「社会計画」	南京金陵大学
第6回 1937年1月23-24日 「中国社会学の建設」 ⁽³⁾	上海八仙橋青年会
第7回 1943年2月12日 「戦後社会建設」	重慶、成都、昆明
第8回 1947年10月1-2日 「中国社会学の今後の発展のとりべき道」	南京中央大学、北平清華大学・燕京大学、広州中山大学、成都華西大学
第9回 1948年10月1-3日 「講演」、金陵大学（10月2日午後）「論文発表」、金陵女子文理学院（10月3日午前）「論文発表」、社会部（同日午後）「社務会議及討論」 北平輔仁大学（10月2日午後）「社会学とその他の社会科学との関係」・清華大学（10月3日午前）「20年来の社会学」、同日午後「中国社会学の展望」	南京中央大学（10月1-2日午前）

出典：「本社歴年年会簡表（中国社会学社記事）」、1948、『社会学刊』、第6巻合刊。「中国社会学社概況」、1948、『中国社会学訊』（中国社会学社二十週年紀念暨第九年年会特刊）、第8期、中国社会学社。「中国社会学社簡史」、1944、『社会建設』、第1巻第1期（創刊号）、社会建設月刊社、p.119。「中国社会学社举行第九年年会及成立二十週年紀念大会」、1948、同上、（復刊）第1巻第7期、pp.75-76。許妙発、1983、「旧中国的社会学団体」、『社会（社会学雑誌）』、上海大学文学院《社会》編輯部、p.43。陳新華、2009、『留美生與中国社会学』、南開大学出版社、pp.152-156。中国社会学社第9年年会二十週年紀念大会（中華民国三十七年十月二日撮于南京国立中央大学）の参加者の写真（https://zh.wikipedia.org/wiki/File:Nanking_1948.jpg）および星明、2021、『中国社会学史の研究』、一粒書房、pp.24-27 などである。第9回年会在中国社会学社の中国本土での最後の年会になった。

うえの表1から、日中戦争の戦中、戦後の中国社会学社の活動およびそのテーマへの影響があらわれていることがわかる。まず、開催年次と開催地であるが、第1回から第6回までは1年ないし2年間隔でほぼ定期的に開催されていた年次大会が第6回と第7回の間には6年間、第7回と第8回の間には4年間の間隔がある、そして開催地は第1回から第6回までは1か所で開催されていたが、第7回では3か所(重慶、成都、昆明)、第8回では4か所(南京、北京、広州、成都)、第9回では2か所(南京の中央大学、金陵大学、金陵女子文理学院と北京の輔仁大学、清華大学)に分散して開催されたことである。また、年次大会のテーマについては、1931年から1945年までの15年戦争の戦中・戦後には「社会計画」(1935)、「中国社会学の建設」(1937)、「戦後社会建設」(1943)、「中国社会学の今後の発展のとりべき道」(1947)、「20年来の社会学」(1948)、同日午後「中国社会学の展望」(1948)といった社会の建設、社会学の建設、社会学の展望などといったテーマが取りあげられているという特徴がみられる。

うえの第6回大会のテーマ「中国社会学の建設」は中国の社会学にとって一つの大きな画期点になっている。というのも、1937年7月7日の盧溝橋事件以降、北京の北京大学、清華大学、燕京大学、天津の南開大学、南京の中央大学、金陵大学、金陵女子文理学院、上海の復旦大学など多くの大学が雲南、貴州、四川省へ疎開し⁽⁴⁾、1930年代末から40年はじめにそれらの疎開地が社会学の研究、教育の新たな中心地になることにより、このことが「社区」(コミュニティ)研究をととした中国社会学の中国化の発展に大きく寄与したからである。実際、この中国社会学社の第6回のテーマ「中国社会学の建設」はその反映である。これは、社会学刊の1936-37年の論文「社区的意義與社区研究的近今趨勢」(呉文藻、1936、第5巻第1期)、「中国社区研究計劃的商榷」(呉文藻、1936、第5巻第2期)、「社区研究與社会学之建設」(趙承信、1937、第5巻第3期)、「郷鎮社区実地研究之方法」(張少微、1937、第5巻第3期)にもあらわれている。

なお、中国本土の社会学者韓明謨、楊雅彬、傅懋冬、鄭杭生・李迎生のだれも言及していないことがある。確かに中国社会学社は中国本土では1949年にその活動を停止したが、実際には1951年に台湾で再建されている⁽⁵⁾。台湾社会学会のウェブサイトには、「『台湾社会学会』は社会学理論、社会問題、社会行政を研究し、また会員間の学术交流を促進することを目的としている。これまで、さまざまな規模のセミナー、シンポジウム、基調講演を数多く開催し、定期的に学会誌を発行してきた。学会の前身は『中国社会学社』で、中華民国19(1930)年に設立され、民国40(1951)年に台湾で再建され、民国84(1995)年の年会で『台湾社会学社』と改称され、89(2000)年の年会で『台湾社会学会』と改称された。定期行物の『中国社会学刊』も第19号から『台湾社会学刊』に改名された⁽⁶⁾と紹介されている。

2. 『社会学刊』の発刊の経緯とその推移

ここでは、社会学刊発刊の経過とその推移について、韓明謨と傅懋冬の記述を取りあげたい⁽⁷⁾。

韓明謨は社会学刊について「……（東南社会学会は：星）1929年7月、『社会学刊』（季刊）を出版し、孫本文が主編、呉景超が編集にあたった。東南社会学会は1年間の活動にかかわらず、第1巻1期から4期の社会学刊を出版した。2年目、つまり1930年に北京の各大学の社会学の教授、陶孟和、許仕廉、陳達らと連合し中国社会学社に改組した。ここにたって、全国規模の中国社会学の団体がやっと正式に組織された。また、もと東南社会学会が発行していた社会学刊も引き継がれた。……社会学刊も抗日戦争によって第5巻2期（ママ）を最後に停刊になった（第5巻3期で休刊になり、1948年1月、第6巻合刊として復刊したが、それが最終刊となった……星）。その後、重慶で出版された社会学の刊行物は国民党社会部と社会学社との共同で孫本文が編集長になった社会建設と社会行政を中心とした『社会建設』⁽⁸⁾（【資料3参照】）と、柯象峯が主編になった『中国社会学訊』⁽⁹⁾（【資料4参照】）である。『社会建設』は5期⁽¹⁰⁾（ママ）まで、『中国社会学訊』は6期⁽¹¹⁾（ママ）まで出版されたが、いずれも社会学の理論的な刊行として数えることができない⁽¹²⁾と述べている。うへの雑誌『社会建設』が発行された1944年は第2次大戦終戦の直前であり、戦中・戦後で混乱した社会事業、社会行政の立て直し、延いては中国社会の建設に多くの課題が山積していた。また、『社会建設』は孫本文が編集長になっていること、国内の社会学者67人が編集委員となっていることから、社会事業、社会行政の実践と社会学の理論の両面の並立を意図したことがわかる。このことは社会学者に研究発表の機会を提供したので、掲載論文に社会学者によるものが相対的に多くみられる。なお、韓明謨は言及していないが、うへの『中国社会学訊』と同時期に中国社会学社広東分社から『社会学訊』⁽¹³⁾（【資料5参照】）が発行されている。

また、傅懋冬もこの社会学刊について「1929年7月に東南社会学会によって創刊された。主編は孫本文である。この雑誌は社会問題を研究し、学術的論議を展開することを主旨とした。第1巻第1から4期は、東南社会学会の編輯であり、第2巻第1期から中国社会学社の編輯に変わり、全国的規模の社会学界の学術刊行物になった。この雑誌は第5巻3期をだした後に、抗日戦争の勃発によって停刊になった。1948年1月に復刊後、わずかに通年合刊の第6巻をだしただけで、その後は再刊されなかった。この雑誌は全部で6巻20期出版され、論稿300編余り、字数185万字余りが掲載された。その内容は論文115編、外国の社会学説の紹介15編でこの二つの文字数で3分の2を占めている。このほかに、社会学者の伝記5編、書評115編、社会調査4編、その他の文章50編あまりであり、この雑誌の出版発行は中国の社会学の建設と学術研究に対して、重要な推進作用を及ぼした⁽¹⁴⁾と事実に基づいて述べ

ている。

3. 『社会学刊』の掲載論文 (【資料6】参照)

龍冠海は「社会学刊論文與篇幅之分析」(社会学刊の論文とそのページ数の分析)のなかで、より詳細に社会学刊の第1巻第1期から第5巻第2期までの各論文の分類およびそれらのページ数を次のようにまとめている。

表2 『社会学刊』の掲載論著の分類別論文数とページ数

論著分類	論文数 (%)	ページ数 (%)
1. 人格	14 (11.67)	276 (11.89)
2. 家庭		
3. 人種と文化	10 (8.33)	196 (8.44)
4. 衝突と順応	3 (2.50)	92 (3.96)
5. 社区	8 (6.67)	171 (7.36)
6. 社会制度	4 (3.33)	39 (1.68)
7. 社会科学と社会過程	1 (0.83)	8 (0.34)
8. 社会病態	15 (12.50)	300 (12.92)
9. 社会調査	18 (15.00)	303 (13.05)
10. 普通社会学と社会科学方法論	47 (39.17)	937 (40.35)
計	120 (100.00)	2322 (100.00)

出典：龍冠海，1937，「社会学刊論文與篇幅之分析」，『社会学刊』，第5巻第3期，中国社会学社，p.37。ただし，()内の%は星が再計算したため一部原典と異なる。また，表のスタイルも原典と異なる。

うえの表2について，龍冠海は「全体からみれば，ページ数の多くを占めている文章は普通社会学と社会科学方法論のグループであり，40%を占めている。続いて，社会調査のグループが14.6% (ママ)，その次に社会病態のグループが11.2% (ママ)を占めている。さらに次には人格と人種および文化の二つのグループがそれぞれ10%強 (ママ)である。家庭のグループは0に等しい。社会科学および社会過程も非常に低く1%未満である。次に社会制度は1.2% (ママ)にすぎない」⁽¹⁵⁾と説明している (ページ数の%は表2のものが正確である……星)。

うえの表2について，龍はHoward Beckerの論文⁽¹⁶⁾に準じて，書評および雑誌紹介を含んでいないし，また分類もBeckerに準じて，①人格 (パーソナリティ) (伝記，人性，児童研究，社会心理学などを含む)，②家庭 (家族) (家庭の歴史，制度，問題などを含む)，③人種と文化 (社会起源，言語，移民，風俗，宗教などを含む)，④衝突 (コンフリクト) と順応 (応化) (階級，種族，政党，宗教などの闘争を含む)，⑤社区 (コミュニティ) (都市，村落，人文地理学を含む)，⑥社会制度 (住宅，教会，学校，娯楽，法廷，社会機関などを含む)，⑦社会科学と社会過程 (経済，政治，文化過程，社会変遷などを含む)，⑧社会病態 (社会病理) (貧

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

困、優生問題、公共衛生、娼妓などの問題を含む）、⑨社会調査（統計方法、ケース・スタディなどを含む）、⑩普通社会学（一般社会学）と社会科学方法論（社会科学の論理、社会哲学と倫理、社会学とその他の科学との関係、社会学教授法などを含む）としている。龍がベースにした Becker の分類を次にあげておきたい。ただし、Becker の 48 の小分類とうえの龍の①から⑩の（ ）内の分類の記述内容とは相違がみられるが、これは龍自身が Becker の大分類のみを採用し、小分類を除いているからだけでなく、龍が中国の社会、社会学の特徴を反映させたことに起因すると筆者は考えている。

表 3 H. Becker による *American Journal of Sociology* 掲載論文の 10 の分類と 48 の小分類

-
- ①PERSONALITY-THE INDIVIDUAL AND THE PERSON 1.Biography. 2.Original nature—instinct,temperament,racial traits. 3.Child study. 4.Social psychology,social attitudes,and the genesis of the person.
- ②THE FAMILY. 1.The natural history of the family and the psychology of sex. 2.The historical family and the family as an institution. 3.The modern family and its problems.
- ③PEOPLES AND CULTURAL GROUPS. 1.Social origins and primitive society. 2.Folklore, myth,and language. 3.Histories of cultural groups. 4.Immigrants,immigration,and distribution of population. 5.Colonial problems and missions. 6.Comparative studies of cultural traits—religion, mores,customs,and traditions.
- ④CONFLICT AND ACCOMMODATION GROUPS. 1.Classes and the class struggle,labor and capital. 2.Nationalities and races. 3.Political parties and political doctrines. 4.Religious denominations and sects.
- ⑤COMMUNITIES AND TERRITORIAL GROUPS. 1.The rural community and its problems. 2. The city and its areas. 3.Social and communal organization. 4.Human geography.
- ⑥SOCIAL INSTITUTIONS. 1.Home and housing. 2.The church and the local community. 3.The school and the social center. 4.Play,the playhouse,and playgrounds. 5.Courts and legislation. 6. Social agencies. 7.Other institutions.
- ⑦SOCIAL SCIENCE AND THE SOCIAL PROCESS. 1.The economic process—economic and industrial organization. 2.The cultural process—education and religion. 3.The political process—politics and the formation of public opinion. 4.Collective behavior,social change,and social progress—fashion,reform,and revolution.
- ⑧SOCIAL PATHOLOGY—PERSONAL AND SOCIAL DISORGANIZATION. 1.Poverty,crime, and deficiency. 2.Eugenics,and dysgenics,and problems of population. 3.Problems of public health and social hygiene. 4.Insanity and the pathology of the person. 5.Vice—alcoholism,prostitution,gambling.
- ⑨METHODS OF INVESTIGATION. 1.Statistics,graphic representation. 2.Mental and social measurements. 3.Social survey—community organization,community education,health,government,mental hygiene,etc. 4.Case studies and social diagnosis. 5.Life—histories and psychoanalysis.
- ⑩GENERAL SOCIOLOGY AND METHODOLOGY OF THE SOCIAL SCIENCES. 1.History of sociology. 2.Logic of the social sciences. 3.Social philosophy and social science. 4.Social ethics and social politics. 5.Sociology and its relation to other sciences. 6.Methods of teaching sociology.
-

出典：Howard Becker, 1932, 'Space Apportioned Forty-Eight Topics in the American Journal of Sociology, 1895-1930', *American Journal of Sociology*, vol.38, no.1, pp.76-78.ただし、原典は箇条書きであるが、ここでは表にして、原典にある 10 分野およびその 48 の小分野のそれぞれの増減についての記述は割愛した。

龍は、「社会学刊論文輿篇幅之分析」のなかで比率だけでなく、5 卷 3 期と 6 期を除く全巻の比率の推移を図示しているが（【資料 7】参照）、図示のみで推移の説明も各巻ごとの比率の数

字も記していないので、ここで巻期ごとの各分類のページ数割合大まかな推移をみておきたい。なお、ここでの%の数字は図示された目盛から筆者が読み取ったものなどで、おおよその数字であることを断っておきたい。また、龍はこの5巻3期の執筆時、2期までのデータなので第5巻は不完全であることを断っている。

- ① 人格 (伝記, 人性, 児童研究, 社会心理学などを含む)
1巻約8%, 2巻約7%, 3巻約27%, 4巻約10%, 5巻0。
- ② 家庭 (家庭の歴史, 制度, 問題などを含む)
全巻をとおして, 0。
- ③ 人種と文化 (社会起源, 言語, 移民, 風俗, 宗教などを含む)
1巻約7%, 2巻約6%, 3巻約6%, 4巻約13%, 5巻約17% (5巻は不完全)。
- ④ 衝突と順応 (階級, 種族, 政党, 宗教などの闘争を含む)
1巻, 2巻とも0, 3巻約14%, 4巻0, 5巻約10% (5巻は不完全)。
- ⑤ 社区 (都市, 郷村 (村落), 人文地理学を含む)
1巻約12%, 2巻約7%, 3巻0, 4巻約3%, 5巻約12% (5巻は不完全)。
- ⑥ 社会制度 (住宅, 教堂 (教会), 学校, 娯楽, 法廷, 社会機関などを含む)
1巻約3%, 2巻0, 3巻約2%, 4巻0, 5巻0。
- ⑦ 社会科学と社会過程 (経済, 政治, 文化的過程, 社会変遷などを含む)
1巻0, 2巻約2%, 3巻0, 4巻0, 5巻0。
- ⑧ 社会病態 (貧窮, 優生問題, 公共衛生, 娼妓などの問題を含む)
1巻約13%, 2巻約16%, 3巻約17%, 4巻約7%, 5巻約3% (5巻は不完全)。
- ⑨ 社会調査 (統計方法, 個案研究 (ケース・スタディ) などを含む)
1巻11%, 2巻17%, 3巻11%, 4巻約7%, 5巻約22% (5巻は不完全)。
- ⑩ 普通社会学と社会科学方法論 (社会科学の論理, 社会哲学と倫理, 社会学とその他の科学との関係, 社会学教授法などを含む)
1巻約39%, 2巻約37%, 3巻約22%, 4巻約59%, 5巻約33% (5巻は不完全)。

うえの龍の数字に、5巻3期と6巻を合わせてみても、「普通社会学と社会科学方法論」が第1位であり、2位以下の「社会調査」、「社会病態」、「人格」、「人種と文化」を大きく離している。

表2の論文数によれば、「社区」は、5巻2期までで8編であるが(5巻1期に1編と2期に2編)、5巻3期に2編、6巻にそれぞれ2編あるので、1936-7年以降、「社区」の増加傾向がみられる。これは、中国の社会学の中国化の反映であるといえる⁽¹⁷⁾。また、龍冠海の分類にはないが、中国の社会、思想に関連する論文、調査は全巻にわたってほぼ均等にみられ、全部で60編みられる。これも中国化の一つの指標といえよう。かつて、筆者は「社会学の中国化とは、当該社会の多くの社会学者が社会学の方法、対象、理論、実践をその社会の社会的・歴史

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

的背景や社会的課題に結び付けることを、その程度の差はあれ、意識的に行なっており、それが顕在化しているばあいをいう」⁽¹⁸⁾と述べたことがある。すなわち、外国の社会学の輸入、紹介の段階から中国の社会的現実それ自体を研究対象にした論考への推移である。「社会調査」は1巻から4巻まで平均すれば11%強であるが、5巻では22%と増加がみられる。「社会病態」は1巻から3巻まで増加し、4巻-5巻は減少している。「人格」は3巻にピークがみられる。「人種と文化」は4巻と5巻に増加がみられる。

おわりに

この資料紹介に基づいて述べてきたことから、要点を以下にあげてまとめとしたい。

1. 中国社会学社（1930年成立）は、上海地区で組織された東南社会学会（1928年成立）が全国規模になった学術組織である。当初の東南社会学会の成立はアメリカ留学から帰国した社会学者呉景超の歓迎会がきっかけとなったが⁽¹⁹⁾、その背景にはアメリカ留学への大きな潮流とその留学者の帰国があった。
2. 中国社会学社の年次大会は、成立した1930年から活動が終結した1948年までの18年間で9回開催されたが、途中で6年間の中断があったし（1937年1月から1943年2月まで）、開催地も分散があった。
3. 中国社会学社の年次大会のテーマは、日中戦争の影響を受けて、社会の建設、社会学の建設、社会学の展望といったが設定された。
4. 社会学刊は1929年の第1巻第1期から1937年の第5巻第3期まで定期的に刊行されたが、以後1948年の第6巻合刊の刊行まで、日中戦争の影響を受けて、11年間の中断があった。
5. 社会学刊の掲載論文には、全巻をとおして中国に関連する論文、調査が相対的に多くみられる。これは、社会学の中国化のあらわれである。
6. 社会学刊の掲載論文には、全巻をとおして普通社会学と社会科学方法論に関するものが相対的に多い。これは、孫本文が指摘したように大学の社会学の教授がかつてどちらかといえば社会事業や社会行政に注意を払わなかったことに理由があろう⁽²⁰⁾。

【資料1】東南社会学会の「組織経過」

上海の各大学の社会学の教授は、ここ数年各大学の社会学部が次第に発展を遂げていることに鑑み、共同研究機関を組織する必要を感じていた。（民国）17年9月6日、ちょうど呉景超博士がアメリカ留学から帰国した際、復旦大学の社会学教授孫本文が一席を設けて、上海の各大学の社会学教授を招待した。出席者は孫、呉景超のほか、余天休、呉澤霖、潘光旦、王際昌、應成一、俞頌華、李劍華、温崇信のほか、ちょうどよく上海にいた南京中央大

社会学教授の游嘉徳も参加した⁽²¹⁾。宴席で、この機会を借りて社会学会を立ちあげる可能性について議論しようという話がでた⁽²²⁾。話し合いの結果、東南各省で社会学を専攻する者の共同研究の連携を趣旨として、全員が東南社会学会を組織することに賛成した。ただちに呉澤霖、潘光旦、孫本文を臨時委員に選び、規約を起草した。まもなく10月11日に茶話会を開き、孫本文、呉澤霖、潘光旦、李劍華、兪頌華、錢振亜、温崇信ら8人が出席し、起草した規約に同意した。さっそく10月29日にもちまわりで委員を選挙した。開票の結果、孫本文が常務委員兼編集主任、呉景超が編集、呉澤霖が書記兼会計に選ばれた。ここに、東南社会学会が正式に成立した。

出典：「東南社会学会紀事 組織経過」, 1929. 7, 『社会学刊』, 第1巻第1期, 東南社会学会, p.1.

【資料2】中国社会学社成立会記

(民国) 17年冬、孫本文、呉澤霖、呉景超、游嘉徳らが上海で東南社会学会を組織し、社会学刊を発行した。18年秋、北平(北京)の陶孟和、許仕廉、東北の劉弱らが東南社会学会と連絡をとり、全国の社会学会を組織することを提唱した。本来、新年のはじめに上海で成立大会を挙げる予定であった。後に事情があつて、2月8、9日の両日に変更して、上海で挙行された。南京地域からは孫本文、呉景超、游嘉徳が、上海地域からは呉澤霖、錢振亜、應成一、北平地域からは許仕廉らが設立準備委員に選ばれた。ここで中国社会学社成立会の経過を次に略述する。

2月8日午前9時、本社は上海四川路青年会で開幕式を挙行した。出席者は、中央、金陵、燕京、清華、北大、厦門、滬江、光華、復旦、大夏、協和の各大学の代表ら100余人であり、孫本文が主席に推挙された。主席は席につき、東南社会学会の改組ならびに中国社会学社の準備経過を報告し、続いて中国社会学社の規約を討論し、採決した。その後、参加を要請した蔡子民先生が演題「社会学と民族学」で講演した。講演後、続いて会議を開催して、本社の第1回の理事を選挙し、孫本文(中大)、許仕廉(燕京)、呉澤霖(大夏)、楊開道(中大)、錢振亜(滬大)、呉景超(金大)、陶孟和の7人が理事に選ばれた。應成一、王際昌、游嘉徳、胡鑑民、呉文藻の5人が理事候補に選ばれた。選挙後、各理事によって集会がもたれ、社の第1期の役員を互選し、孫本文が正理事、許仕廉が副理事、呉景超が書記、呉澤霖が会計に選ばれた。潘光旦、許仕廉、孫本文、呉景超、游嘉徳、應成一、呉文藻、呉澤霖、李劍華の9人が編集委員に選ばれた。そのなかで、孫本文、呉景超、游嘉徳が常務編集員に選ばれた。午後2時半、論文の発表がはじまった。

人口問題、家族問題、社会心理学そして社会学教育の四つのグループに分けられた。人口問題のグループは孫本文が主宰した。発表論文は孫本文の人口問題のなかの文化的要素、呉景超の人間の遺伝の研究の批判についてである。家族問題のグループは呉景超が主宰した。発表論文は潘光旦の家譜の研究、傅尚霖の家族集団の近代の複雑性についてである。社会心理学のグループは呉澤霖が主宰した。発表論文は呉澤霖の社会心理の内容、潘菽の社会の多層性についてである。社会学教育のグループは許仕廉が主宰し、鄧脱摩飯店で教学上の各問題が討論されて、午後9時に散会した。

9日午前、もともと工商部長の孔祥熙に演説を要請していたが、孔部長は健康がすぐれないため、代わって壽景偉先生が代理として来会して、講演を代読した。その後、理事会が再び招集されて、来年の年次大会の問題が検討された。そこで、来年の年次大会は南京で開催し、中心テーマは「人口問題」を討論することに決定した。

また、来年の年次大会委員を9人選び、事務グループに楊開道、陳鐘聲、游嘉徳、論文グループに許仕廉、喬啓明、潘光旦、経費グループに楊開道、許仕廉、錢振亜とした。午後2時半、続けて論文発表がグループごとに行なわれた。社会調査・研究、社会工作（ソーシャル・ワーク）、そして農村社会学の三つのグループである。社会調査・研究グループは應成一が主宰した。発表論文は王濟昌の上海社会の研究、言心哲の中国社会調査運動、孫本文の中国文化研究の発端、游嘉徳の中国社会調査の困難、應成一の社会研究および社会測定についてである。社会工作グループは錢振亜が主宰した。発表論文は嚴景耀の監獄待遇の改善、錢振亜の大学のなかの社会行政人材の訓練、毛起鷄の上海の社会行政部門の概略についてである。農村社会学のグループは楊開道が主宰した。論文発表は楊開道の中国の大学のなかの農村社会学研究であり、張鏡予の農村信用合作の研究は時間の関係で発表できなかった。夜6時半、鄧脱摩飯店⁽²³⁾を借りて、各界を宴席でもてなした。孫本文主席が歓迎のことばを述べた。また、中国社会学社を組織したさまざまな理由を述べた。続いて、胡適之、潘公展、陳立廷、舒新城、朱應鵬、徐蔚南、馬崇淦、袁業裕らが相次いで請われて演説をした。最後に、許仕廉の感謝のスピーチで解散した。また、商務印書館から東方雑誌のカレンダーと日記帳がそれぞれに贈られて、記念とした。

出典：「中国社会学社成立会記」、1930.9、『社会学刊』、第1巻第4期、東南社会学会、附録、pp.1-2。

【資料3】『社会建設』の発刊詞（第1巻第1期、1944年7月）

抗戦の勝利が、日一日と近づいており、建国事業をさらに力を入れて進めなければならない。ただ建国事業は、筋道が複雑であるので、必ず全国の各分野の専門家、学者の各方面で携わっている研究と設計がなければ、各事業を同時に円満に進めることができない。本刊の発行の目的は、全国の理論研究の豊富な社会学者および実際の経験の豊富な社会事業や社会行政の専門家を動員して、戦時および戦後の社会建設に関するさまざまな理論と実際問題を共同で研究討論し、社会学理論と社会的技能・技術を実際に生かすことである。研究者それぞれが個人の立場から、研究でえた収穫を発表することを期待する、これによって建国の偉業に対して、いささかの貢献をしたい。要点をかいつまんでいえば、次の四つの事項がある。

第一に、社会事業と社会行政は現実的な研究を必要としている。わが国の社会事業と社会行政はいままさに萌芽時期にあり、ほぼ輪郭はできあがっているが、急いで内容を充実させなければならない。多くの実際の問題が、専門学者の研究をまっている。どのように社会事業の体系を樹立するか？ どのように社会行政機構を完備するか？ どのように社会行政の効率をあげるか？ どのように社会活動の人材を養成するか？ どのように社会事業活動を監督指導するか？ 必ず実際の状況に基づいて、詳細かつ周到な分析をしなければならない

い。

第二に、社会事業と社会行政は学問上の理論と協力しなければならない。社会事業と社会行政はともに実際に社会問題を解決し、社会福祉を増進する技術的な仕事である。この類の技術的な仕事は経験に基づいて現実の研究を行なうだけでなく、また同時に社会学理論といっそう互いに協力をしなければならない。経験からえられた技術は学問上の理論の解明と修正をさらに進歩させる。どのように学問上の理論に基づいて、社会事業と社会行政の発展をはかるか？ どのように学問上の理論を利用し、社会事業や社会行政の技術の改良進歩を期するか？ 必ず事実と学問上の理論の両方に携わり、徹底的に研究しなければならない。

第三に、社会学理論は不断の研究を必要とする。社会事業と社会行政も社会学理論と互いに協力しなければならないし、社会学理論も倦まずたゆまず高く深い研究を行なうことによって、時代の思潮にしたがっている。同時に、社会事業と社会行政の結果を研究することは、社会学理論の発展を促進することもできる。どのように社会事業と社会行政の経験的データを利用し、学問上の理論の研究を行なうか？ どのように固有の学術的基礎に基づいて、中国社会学の理論体系を樹立するか？ 必ずきめ細かい思考により、多方面の研究をしなければならない。

第四に、社会建設の理論と実際は詳しい研究が必要である。私たちはすべての社会事業と社会行政の活動は社会建設を実現するという目的にほかならないと信じている。したがって、理論と実際の両方面から社会建設のさまざまな計画や問題を研究することが、実際に必要である。どのように社会建設の内容を確定するか？ どのように社会建設の手順の計画をたてるか？ どのように社会建設の仕事にいちだんと力をいれるか？ すべて学問上の理論上と技術上の重要な問題である。

要するに、本刊の使命は、全国の社会学者と社会事業・社会行政の専門家を集めて、社会建設の各理論と実際問題に関して共同で研究することであるが、しかし発刊早々で、欠点も多くあるに違いない。なお全国の諸賢から十分な教えを願うものである。

出典：「発刊詞」、1944. 7、『社会建設』、第1巻第1期、社会建設月刊社。

【資料4】『中国社会学訊』（第1期、1947年4月15日、南京中国社会学社）の附録に記された「中国社会学社通訊之使命」（柯象峯）

中国社会学社は国内の社会学界の人びとが組織した純粹の学術団体で、設立以来すでに20年近く経った。同人は平素研究に没頭し、社会の変化を解明することに尽力している。抗戦期間、後方が混乱し、各地に分散した同人は消息も途絶え、仕事も滞ったが、昨年、国民政府が平時に戻ることに伴い、各種の活動の推進も切迫してきた。印刷経費の制限のため、社会学刊は暫定的に年に1期とする以外に、社会学界の動態および進展を随時知らせ、同人相互の消息を伝え合い、この時の必要を逸しないために、毎月1回通信を発行することを決定した。紙面のスペースが少ないために、内容は暫定的に次のように定めた。

1. 社会学研究の発表および検討。文章は簡潔を旨とすること、
2. 社会学の国内、西洋の新刊書の紹介および書評、

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

- 3, 本社および各分社の活動の消息,
- 4, 社会学界の人事の消息,
- 5, その関連する学術音信。

出典：柯象峯，1947. 4. 15, 「中国社会学社通説之使命」, 『中国社会学訊』, 第1期, 南京中国社会学社)の附録欄。

【資料5】『社会学訊』（第1期，1946年5月20日，中国社会学社広東分社）の編集後記

抗戦中，同人は各地に分散し，音信が乏しくなった。現在，分社（中国社会学社広東分社のこと：星）は国内外の社会学界と，相互に情報を交換するという見地から，特別号『社会学訊』ではもっぱら短編の論文，国内外の社会学研究の概況，社会学界の消息および分社の活動を掲載する。毎月一回の出版とする。

出典：「編集後記」，1946. 5. 20, 『社会学訊』, 第1期, 中国社会学社広東分社。

【資料6】『社会学刊』（全巻）掲載論文目録

『社会学刊』（第1巻第1期，1929年7月）

論著

- | | |
|------------------------------------|-----|
| 社会科学的方法 | 劉国鈞 |
| 社会進化論與社会輪化論 | 黄凌 |
| 強者與弱者の変態心理 | 吳澤霖 |
| 社会学在科学上の地位 | 李劍華 |
| 社会問題的性質 | 朱亦松 |
| 如何發展中国之社会事業 | 龔賢明 |
| 社会個案方法對於学校訓育上之貢獻 | 錢振珏 |
| 對於改良曆書的一個意見 | 馬達 |
| 学説 | |
| 孫末南 (Sumner, W. G.) 伝 | 吳景超 |
| 孫末南の学説及其對於社会学的貢獻 | 孫本文 |
| 孫末南與愷萊 (Keller, A. G.) 的 sociology | 游嘉德 |
| 林希元之荒政政策 | 唐慶増 |

この第1巻第1期の「凡例」には，次のように記されている（【資料7】参照）。

『社会学刊』（第1巻第2期，1929年10月）

論著

- | | |
|-----------|-----|
| 社会動作的兩個分類 | 許仕廉 |
| 社会学與経済学 | 唐慶増 |
| 農村社会調査の研究 | 喬啓明 |

社会学体系論	李劍華
史則研究發端	黃凌霜
中国之劳工立法	祝世康
文化與優生学	孫本文
優生與文化 (與孫本文先生商榷的文字)	潘光旦
再論文化與優生学 (答潘光旦先生商榷的文字)	孫本文
伝記及学説	
海夷史 (Hayes, E. C.) 教授	陳序經

『社会学刊』(第1卷第3期, 1930年5月)

論著	
弱者的心理	吳澤霖
史則研究發端	黃文山
中国農民生活程度之研究	喬啓明
社会調查表格研究	楊開道
編製工資指数之理論與實際上的問題	毛起鷄
伝記及学説	
孔德的生平及其学説	李劍華
斯賓格勒 (Spengler, O.) 的文化史觀及其批評	葉法無
商榷	
社会学名詞漢訳商榷	孫本文
社会学上外国人名漢訳商榷	孫本文

『社会学刊』(第1卷第4期, 1930年9月)

論著	
社会学與民族学	蔡子民
中国文化研究芻議	孫本文
解釈中国男多於女的幾種假設	吳景超
中国農村組織略史	楊開道
社会現象的研究	胡鑑民
社会調查的困難和調查員應有的認識	游嘉德
大学中社会行政人員之訓練	錢振亞
上海之劳工	毛起鷄
位置與社会	黃國璋
優生学與智力測驗 (Eugenics & The Social Good)*	Tompson, W. E. 著 · 金華訳

*Tompson, W. E., 1925, 'Eugenics & The Social Good', *The Journal of Social Forces*, vol.3, no.3.

『社会学刊』（第 2 卷第 1 期，1930 年 10 月）

論著

人類生活的一種分類法 黄国璋

「人權」一個社会的解剖 楊開道

社会研究及社会測驗在中国之討論 應成一

1929 年上海工廠工人實際收入額統計 毛起鷄

学説

霍布浩斯（Hobhouse, L. T.）的社会学説 松本潤一郎著・李劍華訳

『社会学刊』（第 2 卷第 2 期，19 xx 年 xx 月……原典資料に奥付なし）

論著

社会科学的幾條基本假定 劉国鈞

中国社会学運動的目標經過和範圍 許仕廉

社会距離的一個調查 吳澤霖

山西人口問題的分析研究 喬啓明

人類社会的立体性 潘菽

社会控制的性質及手段 孫本文

從農村社会学談到中国民食問題 言心哲

伝記

涂爾幹（Durkheim, E.）伝 胡鑑民

『社会学刊』（第 2 卷第 3 期，19 xx 年 xx 月……原典資料に奥付なし）

論著

東西文化觀 陳序經

現代中国社会變遷概論 周谷城

社会服務事業之財政方面 章元善

業務分類之原理及其方法 毛起鷄

中国社会学發展史上的四個時期 蔡毓聰

調査

日本社会事業之概況 錢振亞

『社会学刊』（第 2 卷第 4 期，1931 年 7 月）

論著

兩漢的人口移動與文化（上） 吳景超

社会調治の問題 余天休

奢侈生活之社会学的觀察 李劍華
討論
社会現象の性質與社会学的真義 葉法無
社会学之对象及其範圍 劉渠

『社会学刊』(第3卷第1期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

論著
中国領袖研究 - 楚項羽 楊開道
何謂社会進歩 孫本文
近四年上海勞資爭議案件彙編 毛起鷄
依賴性的研究 - 社会病理之一 饒強生
法国現代社会学的趨勢 謝徵孚
初民社会 胡鑑民

『社会学刊』(第3卷第2期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

論著
兩漢の人口移動與文化(下) 吳景超
中国近三十年人物の分析 余天休
中国領袖の研究 - 漢高祖 楊開道
学說
現代法国社会学(上) 吳文藻

『社会学刊』(第3卷第3期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

論著
社会学上幾條基本原則及其對於人類知識の貢獻 孫本文
關於社会学上幾個根本問題的討論 胡鑑民
中国農村人口調查研究之經驗與心得 李景漢
群衆の分析(上) 吳澤霖
学說
齊穆爾(Simmel, G.)之社会学学說及其批評 劉渠

『社会学刊』(第3卷第4期, 1933年4月)

論著
社会問題研究の立場点 朱亦松
編製勞工統計之國際的準則 毛起鷄

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

現代種族敵視の起源 寶徳華勒 (Detweller, ママ) 著・呉澤霖訳
洪洞遷民的社会学研究 馬長壽
伝記
達爾徳 (Tarde, Jean-Gabriel) 伝 柯象峯
紹介派克 (Park, R. E.) 教授
考察蘇聯社会事業雜記 許仕廉

『社会学刊』(第4卷第1期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

季亭史 (Giddings, F. H.) 專号
季亭史伝 吳景超
季亭史的社会学学説 吳文藻
季亭史的社会学方法概論 陳達
季亭史社会学理論摘論 Hankins, F. H. 著・費孝通訳

『社会学刊』(第4卷第2期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

論著
国際生活程度の比較 吳景超
普通社会学教材與教法商榷 孫本文
社会学與社会問題的研究 胡鑑民
学説
現代法国社会学 (二) 吳文藻
拉薩爾 (Lassalle, F. J. G.) 社会主義述評 唐慶增
社会学上之關心説 鄧深澤

『社会学刊』(第4卷第3期, 19xx年xx月……原典資料に奥付なし)

論著
世界人口的趨勢 陳達
民族学與社会学 楊堃
宋代社会之一斑 陶希聖
群衆的分析 (続) 吳澤霖
社会調査與中国社会建設 言心哲
社会問題之解決的社会哲学基礎 朱亦松

『社会学刊』(第4卷第4期, 1935年4月)

論著

近世社会科学的成立及其趨勢 張鏡予

文化法則論究 黃文山

社会組織的本質 王政

社会控制的方法 孫本文

調查

南京四十九個兒童小販 金陵女子文理学院社会学系

『社会学刊』(第5卷第1期, 1936年1月20日)

第5届年会論文

優生学與社会設計 潘光旦

社区的意義與社区研究的近今趨勢 吳文藻

中国文化及其改造 黃文山

關於社会建設的幾個基本問題 孫本文

普通論著

政治起源之學說 胡鑑民

生活程度研究方法討論 言心哲

社会問題的連環性 王政

戰爭為進步的原因 龍程芙

統計法個案法及歷史法之理論的批評 毛起鷄

調查

鼓楼医院中七十五位婦人之調查 金陵女子文理学院社会学系

『社会学刊』(第5卷第2期, 1936年4月20日)

論著

現代社会学之起源發展及最近趨勢 孫本文

中国社区研究計劃的商榷 吳文藻

農業起源的理論 楊開道

合作之性質與目的 許道夫

討論

對於吳景超評論孫本文社会学原理之評論 朱亦松

『社会学刊』（第5巻第3期，1937年4月20日）

目録

中国社会組織強化問題之検討	柯象峯
社区研究與社会学之建設	趙承信
鄉鎮社区实地研究之方法	張少微
法国戰時之社会組織	謝徵孚
社会学刊論文與篇幅之分析	龍冠海
国内各大学社会学課程調査	龍冠海
管子的社会思想	龍程英
荀子的社会思想	陳定閔

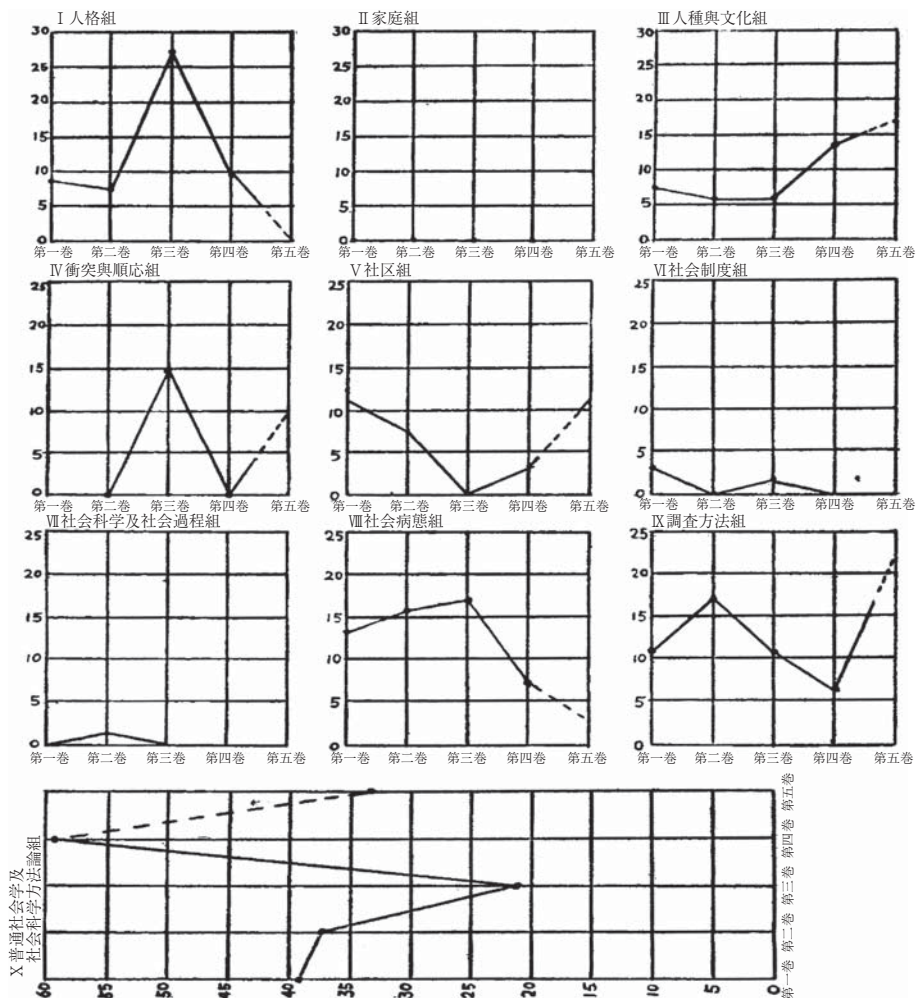
『社会学刊』（第6巻合刊，1948年1月）

目録

復刊詞	孫本文	
一個社会学思想之体系－我对社会学之見解－		應成一
人類学上所瞭解的環境勢力	吳澤霖	
一個社会学上基本概念之検討	朱亦松	
社会学方法論上的幾個問題	趙承信	
論民族社会的性質	馬長壽	
中国差別生育率之研究	蘇汝江	
唐代婦女裝飾風俗考	岑家梧	
晚近中国社会学發展的趨向	孫本文	
我国戶籍制度的研究	周榮德	
論人力的生産制度	袁方	
呈貢的人事登記	廖宝吟	

この最終刊になった6巻合刊には、孫本文による「復刊詞」が記されている（【資料8】参照）。

【資料7】『社会学刊』（第1巻第1期-第5巻第2期）の掲載論文ページ数割合の推移（龍冠海）



出典：龍冠海，1937，「社会学刊論文與篇幅之分析」，『社会学刊』，第5巻第3期，中国社会学社，p.39。点線部分は、龍が第5巻第3期の執筆時のデータは第5巻第2期までであり、データが完全ではないことを示している。なお、各図の上下の原典の文字は手書きで不鮮明であったので、新たに入力したものである。

【資料8】『社会学刊』（第1巻第1期，1929年7月）の凡例

1. 本刊は東南社会学会の定期刊行物であり，社会学の範囲内の各種の研究報告および論文を掲載する。
2. 本刊の内容はおおよそ論文，学説，書評，社会学界の消息，東南社会学会の記事などである。
3. 本刊は純粋な学術刊行物である。掲載する文章は東南社会学会会員が担当する以外に，かつ国内外の学者の投稿を歓迎する。本刊がわが国の社会学界の共同の研究発表の機関

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

になることを望む。

4. 本刊は暫定的に、年4冊を出版し、毎年1月、4月、7月、11月に出版する。

出典：「凡例」, 1929. 7, 『社会学刊』, 第1巻第1期。

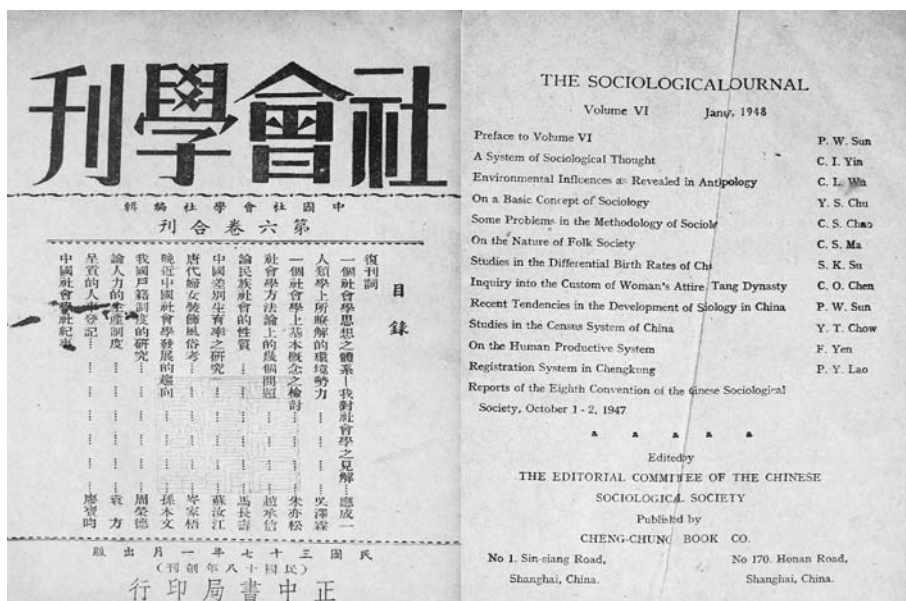
【資料9】『社会学刊』（第6巻合刊，1948年1月）の復刊詞（孫本文）

本刊は民国18（1929）年7月に創刊され、全国の社会学界の同人のための唯一の共同刊行物です。これまで多年にわたって発表された学術論文は150編を超えています。執筆者の多くは国内の各大学の社会学の教授です。民国26（1937）年に第5巻2期（ママ）を刊行後、抗戦が烈しくなり、本学社の経済的困難によって、刊行を継続できず今日まで休刊してきました。またたく間に10年を超えてしまいました。勝利の後、いくたびかの計画を経て、正中書局が発行を快諾してくださり、ようやく学術界で再びお目にかかることとなりました。ただ印刷が困難ですので、暫定的に年1巻の合巻とします。情勢が好転しだい、再び季刊に戻します。およそわが社会学界の同人のみなさんには惜しまず、どんどん原稿を送ってくださるようお願いいたします。これをもって引き続き印刷でき、予定どおりに出版できるようにあります。期待しています。

民国36（1947）年12月1日、孫本文記す

出典：孫本文，1948. 1, 「復刊詞」, 『社会学刊』, 第6巻合刊。

『社会学刊』（第6巻合刊，1948年1月，中国社会学社）表紙と裏表紙



〔注〕

- (1) 韓明謨, 1987, 『中国社会学史』, 天津人民出版社, 星明訳, 2005, 『中国社会学史』, 行路社, p.84, pp.133-134。韓明謨, 1991, 「中国社会学会」, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 『中国大百科全書(社会学)』, 中国大百科全書出版社, p.488。中国における社会学の早期の学術団体についての記述は, 楊雅彬, 1987, 『中国社会学史』, 山東人民出版社。鄭杭生・李迎生, 2000, 『中国社会学史新編』, 高等教育出版社などがある。
- (2) 傅懋冬, 1991, 「社会学界」, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 『中国大百科全書(社会学)』, 中国大百科全書出版社, p.343。
- (3) 1937年7月7日の盧溝橋事件以降, 北京の北京大学, 清華大学, 燕京大学, 天津の南開大学, 南京の中央大学, 金陵大学, 金陵女子文理学院, 上海の復旦大学など多くの大学が雲南, 貴州, 四川省へ疎開し(趙喜順, 1995, 「抗戦时期的四川社会学」, 『西南民族学院学报: 哲社版』(成都), p.160)。1930年代末から40年はじめにそれらの疎開地が社会学の研究, 教育の新たな中心地になった。このことは「社区」(コミュニティ)研究をとおして中国社会学の中国化の発展に大きく寄与した。実際, この中国社会学社の第6回のテーマ「中国社会学の建設」および社会学刊の論文「中国社区研究計劃的商榷」(吳文藻), 「中国社区研究計劃的商榷」(吳文藻), 「社区研究與社会学之建設」(趙承信), 「郷鎮社区実地研究之方法」(張少微)にもあらわれている。
- (4) 趙喜順, 1995, 「抗戦时期的四川社会学」, 『西南民族学院学报: 哲社版』(成都), p.160。
- (5) 台湾の社会学については, 星明, 1995, 『中国与台湾の社会学史』, 行路社の第4章「台湾における社会学の受容と発展 - 1950-60年代の社会学部の創設を中心に」(pp.131-190)を参照されたい。
- (6) 台湾社会学会, https://www.tsatw.org.tw/page.php?menu_id=78&p_id=78。
- (7) 社会学刊については, 孫本文, 1948, 『当代中国社会学』, 勝利出版社, pp.229-237。鄭杭生・李迎生, 2000, 『中国社会学史新編』, 高等教育出版社, pp.85-87にも記述がみられる。
- (8) この雑誌は中国社会学社と国民政府社会部との共同編集で発行された。刊行期間は『社会建設』第1巻第1-5期(1944.7-1946.7)および『社会建設』(復刊)第1巻第1-9(1948.5-1949.1)である。
- (9) 『中国社会学訊』は, 中国社会学社によって1947年から1948年まで発行されたニュースレターである(この『中国社会学訊』の第1期の「附録」に, 柯象峯によって「中国社会学社通訊之使命」が述べられている(【資料4】参照)。
これと同じ形式ものが中国社会学社広東分社によって1946年から1948年まで発行された『社会学訊』である。いずれのニュースレターも, 日中戦争によって地方にバラバラになった社会学者の研究発表, 学者の消息, 交流, 学会のニュースなどが組まれた。この時期, 日中戦争により『社会学刊』は1937年から1948年まで休刊していた。
- (10) 確かに『社会建設』は第1巻第1期(1944年7月)から第1巻第5期(1946年7月)までであるが, それを継続した『社会建設』(復刊)が第1巻第1期(1948年5月)から第1巻第9期(1949年1月)まで, 社会建設月刊出版社から刊行されている。
- (11) 実際は, 『中国社会学訊』は次のように8期までは発行されている。第1期(創刊号), 中華民國36年4月15日, 南京中国社会学社。第2期, 民國36年5月15日, 中国社会学社。第3期, 民國36年6月15日, 中国社会学社。第4期, 民國36年7月15日, 中国社会学社。第5期(中国社会学社第8届年会特刊), 民國36年9月, 中国社会学社。第6・7期合刊, 民國36年11月, 中国社会学社。第8期(中国社会学社20周年紀念暨第9届年会特刊), 民國37年9月, 中国社会学社。

また, この『中国社会学訊』とは別に, 中国社会学社広東分社から『社会学訊』が次のように発行されている。第1期, 民國35年5月20日, 中国社会学社広東分社出版組。第2期, 民國35年7月1日, 中国社会学社広東分社。第3期, 民國35年8月1日, 中国社会学社広東分社。第4期,

1930-40年代の中国社会学社の活動とその学会誌『社会学刊』の掲載論文について（星 明）

民国36年1月15日、中国社会学社広東分社。第5期、民国36年5月31日、中国社会学社広東分社。第6期（中国社会学社広東分社36年年会論文提要専号）、民国36年10月23日、中国社会学社広東分社。第7期、民国37年4月20日、中国社会学社広東分社。

- (12) 韓明謨, 1987, 『中国社会学史』, 天津人民出版社, 星明訳, 2005, 『中国社会学史』, 行路社, pp.134-135。
- (13) 『社会学訊』は、『中国社会学訊』と同じ形式のものであり、中国社会学社広東分社によって1946年から1948年まで発行された。この『社会学訊』の第1期の編集後記に、編者によって発刊の理由が述べられている（【資料5】参照）。
- (14) 傅懐冬, 1991, 「社会学刊」, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 『中国大百科全書（社会学）』, 中国大百科全書出版社, pp.343-344。
- (15) 龍冠海, 1937, 「社会学刊論文與篇幅之分析」, 『社会学刊』, 第5巻第3期, 中国社会学社, p.40。
- (16) Howard Becker, 1932, 'Space Apportioned Forty-Eight Topics in the American Journal of Sociology, 1895-1930', *American Journal of Sociology*, vol.38, no.1, pp.71-78。
- (17) 社会学の中国化の提唱と実践については、星明, 2021, 『中国社会学史の研究』, 一粒書房, pp.55-67を参照されたい。
- (18) 星明, 2021, 同上, p.56。
- (19) 留学帰国者は中国の社会学の発展に圧倒的な影響を及ぼした。これは、1947年当時の全国の大学の社会学の教授145名中、アメリカ留学生74名、フランス留学生11名、日本留学生10名、イギリス留学生9名、ドイツ留学生4名、ベルギー留学生1名である。アメリカ人の教授8名と留学経験のない教授28名を除く109名(75.2%)が留学経験者であり、そのなかでアメリカ留学生が67.9%を占めている（孫本文, 1948, 「中国各大学社会学教授姓氏録」(1947年12月調査), 『当代中国社会学』, 勝利出版公司, pp.319-327から星が集計した）。
- (20) Pen-wen Sun, 1949, "Sociology in China", *Social Forces*, vol.27, no.3, p.250。なお、一般社会学の高い割合は、この時期の中国社会学の特徴なのかについて、他の国との比較が必要である。これは今後の課題にしたい。
- (21) この歓迎会に参加した教授の留学経験は次のようである。孫本文：アメリカ留学、呉景超：アメリカ留学、余天休：アメリカ留学、呉澤霖：アメリカ留学、潘光旦：アメリカ留学、王際昌：不明、應成一：アメリカ留学、俞頌華：不明、李劍華：日本留学、温崇信：不明、游嘉徳：アメリカ留学（『社会学刊』の各巻。孫本文, 1948, 前掲書, pp.319-327）。
- (22) 中国社会学史の研究者で上海社会科院社会学研究所の許妙発は、「……欧米諸国に留学した中国の社会学者が次々と帰国するのにともなって、国内で出版される社会学の著作は年をおって増加し、社会学も少数の大学の科目から一般の大学の課程に、選択科目から学部を設置に次第に拡大していき、大学のなかで一定の地位を獲得していた。このように社会学の団体を組織する考え方が一部の社会学の教授のなかであたためられはじめていた。1928年になって、偶然の機会によって、この考え方はようやく実現することができた。それはこの年の9月6日、社会学者呉景超博士がアメリカから上海に帰国した時、復旦大学の社会学教授の孫本文が呉を歓迎するために、上海の各大学の社会学をひろく招待し、集まった。この機会を借りて、みんなで社会学の学術団体を組織する可能性の有無について議論した。……」とあるように、東南社会学会の成立の社会的背景と直接のきっかけを述べている（許妙発, 1983, 「旧中国的社会学団体」, 『社会（社会学雑誌）』, 第4期, 上海大学文学院《社会》編輯部, p.42）。
- (23) 鄧脱摩飯店は西洋レストランで、中国社会学社の設立会が举行された1930年当時、現在の上海市の南京東路と四川中路の交差点付近にあった（<https://www.163.com/dy/article/ESHBLK000541AH9L.html>）。

〔謝辞〕

本稿の作成にあたって、【資料3】『社会建設』の発刊詞（第1巻第1期，1944年7月）は、2014年に、筆者の上海滞在中に北京の国家図書館からPDFファイルで提供を受けたが、いくつもの文字や文章が不鮮明で、筆者にとって判読不能の箇所がいくつもあった。画数の多い繁体字のため、いっそう不鮮明であった。幸い、城西国際大学の姜寅星先生から、潰れた文字の判読をしていただき、問題を解決することができた。記して、感謝申し上げます。

（ほし あきら 佛教大学名誉教授）
2021年3月22日受理